

第62回 府中市民芸術文化祭

各流合同謡曲大会

令和8年/2026年11月23日(祝・月曜日) 午前10時開演
府中の森芸術劇場ふるさとホール 入場無料



主催:府中市・府中市芸術文化協会
共催:公益財団法人 府中文化振興財団
主管:府中市謡曲連盟

(10:00 開 演)
開会の辞

○印は、地頭

素 謡
観世流

鶴 亀

謡曲入門教室

シテ (皇帝)
ワキ (大臣)

日江井 栄二郎
亀田 恵

地謡 勝岡 ゆかり
桑田 陽乎
○山口 正登
中村 陽子
小林 陽月

素 謡
観世流

敦 盛

楽謡会

シテ (草刈男/平敦盛)
ワキ (蓮生法師)

成家 鉄夫
野口 敏也

地謡 芝原 央充
○太田 千鶴

素 謡
観世流

定 家

凜謡会

シテ (里女)
ワキ (旅僧)

福井 美津子
荒地 光泰

地謡 山口 正登
○押田 連
桑田 陽乎

仕 舞
観世流

竹生島

太田 千鶴

華扇会

猩 々

野口 敏也

地謡 荒地 光泰
○押田 連

素 謡
観世流

菊慈童

竹謡会

シテ (慈童)
ワキ (勅使)

納原 幸子
眞鍋 智代

地謡 平松 保子
佐藤 正行
○芝原 央充
山田 久代
伊藤 七子

素 謡
観世流

大佛供養

青謡会

子方 (源頼朝)
立衆
ツレ (景清の母)
シテ (悪七兵衛景清)
ワキ (頼朝の臣)

伊藤 七子
山田 久代
平松 保子
糸川 秀穂
佐藤 正行

地謡 山田 久代
眞鍋 智代
○芝原 央充
納原 幸子

(13:00 午後の部 開演)

府中市謡曲連盟 会長挨拶

芝原 央充

仕舞
観世流

老 松

安藤 史登

こども仕舞教室

経 正 クセ

風間 久江

地謡 荒地 光泰
○押田 連

経 正 キリ

風間 優里

羽 衣 キリ

中村 滢里

蟬 丸 道行

神谷 紗帆

放下僧 小歌

大北 将生

紅葉狩 クセ

篠原 瑚音

素謡
観世流

小 督

鳳謡会

トモ (侍女)
ツレ (小督局)
シテ (源 仲國)
ワキ (勅使)

平林 世津子
中野 明子
栗山 幸子
石渡 英佐子

地謡 伊藤 紀子
○芝原 央充

素謡
金剛流

墨染桜

弥生会

シテ (里女／桜の精)
ワキ (上野峯雄)

佐藤 和子
長谷川 東亜子

地謡 熊谷 順子
○岩川 恵理子
中村 洋子

連吟
宝生流

班 女

宝生会

三宅 紀代栄
山部 絹子

仕舞
観世流

賀 茂

荒地 光泰

華扇会

松 風

渡辺 昌子

地謡 荒地 光泰
○押田 連

天 鼓

押田 連

※役謡者および地割は、左方の見所（客席）に向かったの配列となっています。

仕 舞 金剛流	雪 クセ	長谷川 東亜子	弥生会
	楊貴妃 キリ	熊谷 順子	地謡 佐藤 和子
	東 北 クセ	佐藤 和子	岩川 恵理子
	雲林院	岩川 恵理子	○中村 洋子
			熊谷 順子
			長谷川 東亜子

仕 舞 宝生流	巻 絹 キリ	三宅 紀代栄	宝生会
			地謡 山部 絹子

素 謡 観世流	通小町		松風会
	ツレ里女 (小野小町)	桑田 陽乎	地謡 田嶋 雅子
	シテ (深草少将ノ怨霊)	渡辺 昌子	○山口 正登
	ワキ (僧)	岡本 浩次	

附祝言
閉会の辞
(16:30 頃 終演予定)

初心者から経験者まで、入会希望のかたを歓迎しています。
お気軽にご連絡ください。

府中市謡曲連盟 観世流、宝生流、金剛流
〒183-0001 府中市浅間町1-16-1-708 芝原央充 方 ☎・FAX 042-388-3299 (留守電)
fuchukanze01@gmail.com

素謡・独吟曲目のあらまし

「鶴亀（つるかめ）」 古代中国の朝廷では新春に年始めの節会が催され、不老門において天子は百官卿相の拝賀を受け、萬民も群集して拝礼します。その後嘉例により鶴亀を舞わせ天子も舞楽を奏させ自ら舞い、そののち輿に乗って長生殿に還御します。

「敦盛（あつもり）」 平敦盛を討って出家し蓮生となった熊谷直実が一の谷で昔を追懷していると、草刈りたちが来て笛を吹いた一人が残り、彌陀を十度唱えてほしいといい姿を消します。蓮生が夜もすがら回向すると敦盛の幽霊が現れ、平家の栄華・没落、自分の最期の有様などを語り消え去ります。

「定家（ていか）」 旅の僧の一行が都の千本で時雨を避けていると、女が現れ式子内親王の墓に案内し、定家の執心は死後も葛となって墓にまといついていると救いを求めます。僧たちの読経の功德で一旦は葛がほどけ成仏した内親王は喜びに舞いますが、墓に戻ると葛はまたまとわりつきます。

「菊慈童（きくじどう）」 魏の文帝の臣下が、薬の湧水を見て参れとの宣旨で酈縣山に着くと、周の穆王に仕えた慈童だという男が現れる。七百年も前のことと不審がると、帝が授けた二句の偈が菊水に与えた効験だと答える。男は帝の聖徳を讃え不老不死の霊水を施し自らも口にし消え去ります。

「大仏供養（だいぶつくよう）」 平家没落の後、悪七兵衛景清は大仏供養が行われると聞き、都から南都に住む母を訪ねると、頼朝を狙っているという噂は真かと尋ねられ決心を語ります。大勢の家来を連れ頼朝が供養の場に臨むと、景清は近づき発見され、銘刀あざ丸を振るって闘い落ち去ります。

「小督（こごう）」 高倉院が寵愛していた小督が中宮との関係で姿を隠してしまったので、院の命により弾正大弼である源仲国は捜しに出かけます。折から八月十五夜、嵯峨に隠れ住んでいた小督を琴の想夫恋の曲で探し当て、院への返書を携えた仲国は名残の酒宴の後、駒に打ち乗り帰ります。

「墨染櫻（すみぞめざくら）」 貴族の上野峯雄が出家し仁明天皇の深草の御陵に赴き桜も墨染に咲けと和歌を読むと、一人の女が表れ尼にしてほしいと望み、叶えてやると姿を消します。その夜桜の精が尼姿で現れ、桜の素晴らしさを説き出家できた喜びを舞いながら消えて行きます。

「班女（はんじょ）」 美濃の国野上の遊女花子（班女）は、旅の途中の吉田少将と将来を約して扇を交換して、以来勤めに出ないので宿を追われます。少将は再び野上を尋ねますが班女はおらず、京に帰り下賀茂神社に参詣すると班女がおり、従者の命による舞を見て気づき互いの扇を確認します。

「通小町（かよいこまち）」 八瀬で一夏を過ごす僧が、毎日木の実や薪を届けてくれる女性に名を尋ねると、小野小町であることをほのめかして去ります。僧が小町を吊っていると深草少将の怨霊が現れ成仏させまいと止めるので、百夜通いの様を見せるよう所望すると綿々と語り共に成仏します。